

『#国境』（黒川博行著、1998 年）を読んでみた。著者は京都市立芸術大学彫刻科卒業後、会社員、府立高校の美術教師として勤務。『キャッツアイころがった』でサントリーミステリー大賞を受賞、『破門』で直木賞、20 年ミステリー文学大賞を受賞した。最高傑作については「疫病神シリーズの最高傑作『国境』」という声が多い。リアルな警察小説として『悪果』が最高傑作」という意見もある。本作で推理作家協会賞受賞。

ヤクザKと建設コンサルタントNの二人組（“疫病神”と言われている）が、組の上層部が詐欺師グループにだまし取られたカネを奪回するため北朝鮮に潜入する話である。

全編が大阪弁による会話で成り立っている。本作は、前作『疫病神』の続編として生まれたという。この小説の連載開始は 1998 年である。主人公ふたりの性格設定に負うところが物語を面白くさせている。とくに極道のK。エンターテインメント史上、最強かつ最凶無比の極道であろう（喧嘩が強く、情に厚い？）。

独裁国家内部を小説で描くのは、困難きわまる作業である。緻密な取材は不可能に近く（しかし「成分」によって成立する階級社会の姿や市民生活のディテールを描写）、想定不能の圧力が予想される。2 回の北朝鮮潜入取材を敢行し、中朝国境の現実を描きつくした作品であり、最高傑作と評価する者もいる。

一度目は団体旅行客として、二度目は中国から北朝鮮への密入国である。その手伝いをする行商の爺さん、北朝鮮内部にあってなお俠気を失わないゴロツキの親玉など、脇の登場人物も魅力的である。カネを取り戻さないと、自分の命がなくなる。果たして、カネを取り戻すことができるのか。

『国境』の時代（2000 年代）は唯々貧しく、庶民は飢餓で死んでゆく時代であったが、2025 年の北朝鮮はどう変化したのだろうか。

『国境』の時代（2000 年代）の北朝鮮

- ・経済状況：慢性的な食糧不足と経済制裁により極度の困窮状態。闇市場（ジャンマダン）が台頭し、庶民は非公式経済に依存。
- ・体制：金正日政権下での強権体制。情報統制が厳しく、国外との接触は厳罰対象。

・対外関係：六者協議などを通じて核問題の外交的解決を模索していたが、基本的には孤立路線。

・密輸・脱北：中国国境を越えた脱北や密輸が横行。『国境』でも描かれるように、北朝鮮と中国の国境地帯は犯罪と情報の交差点だった。

現在（2025 年）の北朝鮮の主な変化（金王朝は健在）

1. 経済の部分的自由化と都市近代化

・自家用車の所有が解禁：2025 年初頭から、平壤では個人所有の車（黄色ナンバー）が急増。これは「私有財産の容認」という大きな政策転換の兆候。

・携帯電話や消費財の普及：一部都市部ではスマートフォンや家電の流通が進み、消費文化が芽生えつつある。

・平壤の近代化政策：金正恩は「文明都市」建設を掲げ、首都のインフラ整備や高層住宅建設を推進中。

2. 軍事強化と核戦力の高度化

・ミサイル発射の頻度増加：2025 年はすでに前年の 1.5 倍の発射回数を記録。新型 ICBM や SLBM（潜水艦発射弾道ミサイル）の開発も進行。

・核保有国としての自認：非核化交渉は「夢物語」と断言し、核戦力の維持・拡大を明言。

3. 対外関係の変化

・韓国との対話再開模索：韓国と中国が北朝鮮との対話再開に向けた協力を模索中。ただし北朝鮮側は強硬姿勢を崩していない。

・ロシアとの軍事協力：ロシアへの派兵や軍事技術の共有が報じられ、国際的な孤立を補う新たな連携が進行中。

4. 文化統制と内部の緊張

・韓国文化の流入と取り締まり：「平壤文化語保護法」により、韓国ドラマや K-POP の影響を排除する法整備が進む。USB 経由での密輸が続く中、若者文化の浸透が体制の不安定要因に。

評価：★★★★★